

建仁寺妙喜庵看寮子建浄業小伝

玉 村 竹 二

建仁寺妙喜庵といえ、かの有名な五山文学作者中巖圓月の寿塔であり、はじめ妙喜世界といい、その派祖大慧宗杲の像を祠るために万寿寺内に営まれ、のち建仁寺に移建され、応安八年正月に中巖が示寂するや、ここに塔せられたのである。その看寮——塔院の主宰者を塔主たちということはいうまでもないが、看寮とは、正式の塔主ではなく、留主をあずかるものをいう。一に看坊・看司・看護などともいう——である子建浄業の小伝について管見に入つた史料を中心にして紹介しようと思う。中巖の寿塔の看寮であるから、勿論中巖の小師（弟子）である。中巖は弟子を余り養成しなかつたが、それでも東湖浄晄・東生浄旭・帰宗浄憚・浄見・仲和原礼・原楚・居潜□謙・永林・永勤・処俊・通宗・南宗建幢など十数人の名が伝わっている。そのうちで東湖浄晄は越前弘祥寺に出世して十刹西堂の位に上り、南宗建幢は山城安国寺より、建仁寺（第九十六世）南禅寺（第百七世）に昇住し、五山之上の紫衣の長老になっており、師の中巖が建仁・建長・万寿の住持にとどまったのに比べれば、僧階の上のみでは出藍の誉があるといふべきであろう。しかし今ここに述べようとする子建浄業は、位蔵主にとどまって、一生黒衣の平僧に終つたむしろ無名の一文筆僧である。

子建の名が、はじめて中巖圓月の作品に見えるのは延文五年のことで、『東海一瀕集』の明和版本の卷一の五言律詩の部に

歳次庚子、行年六十一、中秋無月為憾、以老矣、明年不可期也、詩与浄業、亦以夫頗聰明故寵之也、

中秋当賞月、初夜未遭晴、座破宵分暗、望回天未明、傾將難再覩、残有似新迎、徹曉忘衰疾、後年恐隔生、

と見えるのがこれであり、中秋無月の詩を浄業に与えているのである。聰明なるが故に之を寵して詩を与えたと序にあるところより見ると、余程中巖の鍾愛するところであつたらしい。『自歴譜』によると、この庚子延文五年には、中巖は漸くにして関西にその居を移す意が動いたらしく、前年入院した京都の萬壽寺の東北隅に、この年の秋前述の妙喜世界を剏建したのである。この中秋の観月も、新築の妙喜世界に於いて行なわれたのかも知れない。

その翌康安元年春、中巖は万壽寺を辞し、上野利根の吉祥寺（中巖が開山であり、この時も住持現任のままであり、寧ろ妙喜庵が出来るまでは、こちらの方が唯一の自坊であつた。）に帰住したが、子建は新設の妙喜庵に残されたらしく、この年の六月二十七日に諏訪貞継が京都の寓館に卒したのを子建が吉祥寺の中巖に書を呈して通告している（『自歴譜』及び『東海一瀕集余瀆』の祭文の部「祭諏方神金吾文」）。また何時の頃か、定かではないが、恐らく妙喜庵中の一室を与えられて、自らの書齋としたであろうが、その室名を中巖に請い、中巖はこれに「意承」の号を与え、その記を製している（『東海一瀕集』明和版本卷三の記の部）。

子建浄業は、恐らく京都の人だと思ふが、その出自の族姓を知ることが出来ない。ただ『自歴譜』の貞治五年丙午の条に「是歳十二月九日、浄業父死了」と見えている。特に自歴譜に載せているということは、中巖にとって最

も大切な弟子の父の死ということが、中巖自身にも大問題であったことを示すことになる。然らば、その父も中巖と友人知己又は特別の立場に在る人であったのかも知れない。(遺記参照)

さて貞治六年秋、中巖は建長寺住持の命を承けて、久しぶりに関東に下向する。この時六十八歳であった。子建浄業は、この際、師匠に随侍して、建長寺に赴いたようである。中巖は建長寺に十月三日入院し、翌年応安元年春足利義詮が薨じたので、同寺を退いて急遽帰京する。その間約半年、同寺内に梅洲庵を構えて、閑居の寮とした。

しかし子建は、関東に於いて、石室善玖・義堂周信など、先輩の文筆僧に知遇を得たためか、又は建長寺梅洲庵の看寮を委ねられたためか、ややおかれて上京したと見られる。中巖と共に建長寺梅洲庵に在った際には、時折り瑞泉寺に義堂周信をたずね、作品を呈して補正を求めていたように、『空華日用工夫略集』にも

四十四歳、正旦、坐禪、不出戸而接客、凡俗間賀礼、一切免之、業子建寄八句偈慶歳、余戒以定坐、默不敢輒和、

とあり、元日に賀歳の律詩を呈したところ、俗礼を排する意味で、これをたしなめ、むしろ正旦には坐禪すべきであると言いふくめたが、その手前すぐさまには、子建の来詩には和韻を与えなかったが、そこは義堂と雖も内心は詩興が湧いたのであろうか、子建の詩がよく出来ていて、そのままつき返すに忍びなかったのであろうか、結局は和韻の詩を与えているように受けとれる。又『空華集』卷二、七言絶句の部に

中心・子建諸友、入山值雪一宿、及曉興發、登一覽亭、小子怯寒不出、戲作小詩、

諸君競愛雪中、借履登臨趁曉看、一箇頭陀殺風景、地爐燒餅破朝寒、

と見える。これは詩の排列の順序からいって貞治六七年頃である。そうすれば子建が鎌倉下着直後のことで、矢張り瑞泉寺に義堂を訪れ、雪に降りこめられて一宿し、翌曉詩興がおこって、夢窓派の方外宏遠の弟子中心中樹（心翁中樹）等と共に一覽亭に登ったが、義堂は寒さに怯えて、ひとり室内に餅を焼いて朝寒を凌いでいたといわれている。凡そ子建が義堂に親炙しようとして、義堂からも厚遇されたことは右によってよく推察出来よう。

一人鎌倉に残った子建（或は中巖の命により梅洲庵の看察として、その跡仕末のために残留したか）も、応安二年春には、建仁寺妙喜庵に居るといふ明証があるので（後引の『一瀦余滴』）、一年とは残留出来なかつた。さていよいよ上京というときに、建長寺金竜庵に寓した石室善玖は、子建のために送別の偈を作り、その師中巖に兼簡した。

寄業侍者兼簡巖翁和尚

妙喜庵中不動尊、分身占断別乾坤、一庭瀟洒邀涼月、六戸玲瓏燦曉暉、
類聚群飛皆燕雀、搏扶独化是鵬鯤、巖翁同入鳳台室、把手何時細討論、（『石室和尚語錄』偈頌の部）

これによると、石室善玖ほどの大家が、子建を「妙喜庵中の不動尊」たる中巖の「分身」と見做し、それが京の妙喜庵とは「別乾坤」である鎌倉建長寺の梅洲庵を「占断」していると子建のことを称揚しているのである。（追記参照） 義堂周信も『空華集』卷八、七言八句の部に

業上人帰省中巖師、次韻贈別、

凌霄大士臥雲門、道侶曾空冀北群、慣把竹筥揮衲子、橫將宝剑嚇魔軍、青天口罵千峰雨、白日身眠一榻雲、
 子去為吾推枕起、須防鼻息有人聞、

とその師中巖に対する賛辭を呈しているが、更に『空華集』卷三、七言絶句の部に、子建の詩に対する和韻がある。

次韻答業子建兼簡中巖和尚 三首

但得心同信乃通、不須更問馬牛風、試看第五橋辺水、日夜朝宗只向東、

東山水上諸流通、添得微涼殿閣風、紙襖抄來看又別、千光塔在鴨川東、

有書煩汝為吾通、問訊山頭老掣風、三尺竹篔括在手、不応長掛太湖東、⁽¹⁾

中安二年己酉には、建仁寺妙喜庵の看寮をしている。このとき中巖は一旦鎌倉の梅洲庵より妙喜庵に帰り、再び出京して近江杣庄甲良の竜興寺に赴いているので、子建が留居を守らなければならなかった。そして中巖は近江から子建に詩を贈って、妙喜庵庭中梅花の下の水仙花が開いたかどうかを問うている。『一漚余滴』に

村里梅開、蘭未放花、詩奇妙喜看屋浄業、問水仙花如何⁽²⁾

幽蘭厄雪未全開、先讓春風与桮梅、々下水仙着花否、新詩撩撿好相看、

と見えるのによつて知られる。『空華集』卷十二の序の部に

序用文上人詩軸

巨嶠以亨記史、擬河梁為詩、贈其友用文上人、賡歌者十有二人、咸与以亨竝駕者也、編成、徵序於錦屏山人某、惟上人出処之跡、雲樹化離之態、以亨・子建、皆自叙篇首、且群公詞于各章矣、余復何言、姑假上人雅表以發其蘊焉、⁽³⁾中安二祀龍集己酉初秋朔序、

とあり、建長寺に在った用文侑藝（一山派、大同啓初の弟子）に贈る詩軸に詩軸の發起者以亨得謙と共に、子建が在録

中に作ってのこして来た序文を篇首に付したらしい（しかしそのときは子建は京都に在ったのであるが）。それに義堂が第三の序を付せんことを求められたのである。

このように、子建が上京して後も在鎌の義堂との交渉は絶えず、応安三年庚戌に建仁寺の子玉（一山派）が法叔某に従って建長寺に赴いたので、建仁寺の群玉林の友社の人々が詩を以て帰京を促した詩軸が鎌倉に届き、子玉はその軸を持って瑞泉寺に義堂を訪れ、その序を求めた。『空華集』卷十二の序の部に、

招瑋子玉詩序

東山子玉瑋上人、年少而好詩者也、性敏而姿美、以叔父游学於太清・要堂伯仲之間、其所好亦可知矣、（応安三年）年、從叔父而来関左、上人遂栖錫於巨福之山、以游以樂、壯海東法窟之觀、極天下禪叢之美、於是上人、東山

之興不復作矣、是夏也、東山諸彦、懷子玉者、会于群玉林、以其所好、為詩以招之、詩成、好事者永相山、（良永）預其編次、遂繕写以遣、子玉得之、不敢私於篋笥、一夕携過錦屏、出以夸余、時也海東鳴於詩者、数人在席、競觀如堵、其詩作者二十四人、若曰篋曰見曰紹曰業曰永曰貞、皆与余素且厚者也、其詩則妙喜一言以評之曰、碧玉盤走明珠、是尽矣、吾不復論也、（略）

その軸中に器之令篋・月篷円見・古庵普紹・相山良永・正仲彦貞等二十四人に混って子建も作者の一人に加わっていたことを義堂は「余と素にして且つ厚き者」の一人として数えているのである。

さて子建は、一旦京都にかえり、妙喜庵の看寮におさまったが、その後二、三年のうちに、もう一度関東に下向、建長寺梅洲庵に在ったようである。『石室和尚語録』によると、再び帰京するに際しての餞偈が見える。

送業藏主行

巖翁家業無多子、伝得陳年妙喜衣、既見去留融動靜、誰言語默涉離微、我知世上人情險、君去山中交友稀、莫怪梅洲新雪裏、凌寒掃榻待來歸、

石室は「我は知る世上人情の險しきことを、君は去って山中交友稀なり」と、子建を交友の尤なるものに数えて、別を惜んでいる。そして新雪の積った梅洲庵で、寒さを我慢しながら禅榻を掃って、子建の三たび同庵に帰來するのを待とうといっている。なおこれが若し応安二、三年の頃だとすれば、石室は建長寺住持であった。又子建は応安元年に鎌倉を去るときには「侍者」だったが、今回は「藏主」に僧階が昇進しているのにも注目すべきである。

ところが、その後間もなく、子建は入明しているのである。『空華日用工夫略集』によるとその応安六年正月九日の際に、曹洞宗宏智派わんしの僧徳巖如進と雲溪如竜のち起潜如龍と改称が義堂を鎌倉の南陽山報恩寺に訪れ、子建浄業が明みんから発した義堂宛の書信を手交している。即ち

九日、如竜・如進二侍者來、出業子建書、々中説、寿椿庭回自唐、大道在天界寺、津要関杭之中竺、端介然臥病明州翠峯、

とあり、その書の内容は、椿庭海寿は日本に帰朝した、大道得志は天界寺に在る、要関中津（即ち絶海）は杭州の中天竺寺に在る、介然中端は明州の翠峯に臥病している、と当時の在明日本留学僧の動靜を伝えるものようである。椿庭が帰朝したのは応安五年のことであり、絶海が中天竺寺に季潭宗渤(3)に参じていたのは応安四年のことである。応安四年には祖來という明の使節僧が帰国しているから、子建は或はそれと同船して入明したのかも知れない。

その入明の目的は、よくわからぬが、師の中巖の歩んだ道を辿りたいのが第一の目的であり、更に想像を逞しくすれば、師の著作、『中正子』なり、『語録』なりに、師の因縁浅からぬ大慧派の尊宿から序文を貰うけたい為ではなかつたかと思われる。よつて子建は、ついに天界寺に赴き、笑隠大新（蒲室）の法嗣季潭宗泐（全室）に謁している。季潭の師笑隠は中巖の師東陽徳輝と同門（共に晦機元照の法嗣）であるから、季潭は中巖と法系上の従兄弟に当る。そして序文が貰えたかどうかは、その文が現存しないのでわからないが、少なくとも子建は、そのとき同行した日本僧のうち、途中で十名の亡僧が出たので、それらの亡僧の追福のために季潭に請うて対霊小参を挙揚してもらい、その法語を記してもらっている。その文が現今東福寺靈雲院の所蔵にかかる『万法語』と題する法語雑記の古写本のうちに見出されるのである。即ち左の通りである。

日本比丘浄業請為亡僧周寂等对霊小参

道無方所、何分彼此之殊、法離見聞、寧住去來之相、若能頓捨從前逆順之縁、發起勇猛精進之心、不顧危亡、不憚寒暑、行脚参方、親近知識、究明此事、期於必悟、須是慷慨^(脱アルカ)之士、方能如是独脱超群、慈明易服軍伍往参汾陽、先行不到雪峰、三登投子、九到洞山、末後太過、所以道、四海共参尋、十方同聚會、路逢遠道人、不将語默对、今日本国諸比丘周寂等十人、跋涉鯨海、触冒酷暑、遠自其国來此参禪、道途辛苦、因致斃^(脱アルカ)、可謂為法忘軀、但其不得親近知識、参叩此事、有志弗就、良可惜也、然而於身無所取、於修無所^(着)、於法無所住、過去已滅、未來未至、現在空寂、当此之際、以何為身、以何為心、以何為仏、以何為祖、以何為禪、以何為道、拈主丈、卓一下云、千古万古黒漫々、填溝塞壑無人会、復説曰偈、

善哉諸比丘 為法共忘壽 鯨波既不驚 酷暑復何有

真參無所參 真叩無所叩 彌勒樓閣前 文殊是初夏

心々自融通 法々速成就 無生亦無滅 非淨亦非垢

設參用資嚴 応時聊納祐 一句恰相当 三々不成九

亡僧十人

周寂・正肇・至道三人、到天界亡、用恰・一桂・善資三人、海舟中亡、良穂・建萃二人、明州正慶寺亡、明輔、明州天寧寺亡、淨見、越州舟中亡、因業上主請、書小參、

洪武七季七月十有一日、天界住山 宗泐書、

これは子建淨業一行が目的地たる金陵の天界寺（大龍翔集慶寺）に到るまでの途中で病歿した同行僧十人について、辛うじて安著したうちの一人たる子建淨業が、その寺の当住季潭宗泐に請うて、その追薦のために對靈小參仏事を執り行ない、その際にのべられた法語を記してもらったものである。これら十人は、いずれも経歴のわからない人であるが、ただ一人「淨見」という人は、子建と同じく中巖圓月の弟子であり、『文明軒雑談』のうちに、その名が見える。恐らくは子建と相携えて、師の著作の証明を求めするために中国の法類を歴訪する旅に出たものであろう。それにしても一行のうち十人の死亡者を出したのは驚くべきことである。果して一行総員何人のうちの十人であったのか。三十人としても三分の一の死者を出すとは、当時の渡海入明が如何に困難であるかを物語って余あることである。或はこの回の一行は格別に不幸な条件に遭遇したのかも知れない。一行のうちに伝染病者が発生して、次

々に感染したとか、又は中国大陸に於ける天災地変にあったとかいうことがあったのかも知れない。

なお、この季潭の対靈小参を記した墨蹟を、現今しばしば目にするのである。そのあるものは法語の本文を墨書したあとに、亡僧の名を朱書したのを見たし、またあるものは、法語のみが綺麗に書いてあった。しかし子建浄業は、果して無事日本に帰り得たのであろうか。『東山塔頭略伝』の妙喜庵の条に

開基仏穂慧濟禪師

子建名浄業 藏主、入元、^{〔明カ〕}歿於彼地、

と見え、明の地に於いて、これら十人の同輩の後を追って寂していることになっている。子建が所持していたものを同輩が持ち帰ることは大いに有り得るから、矢張りこの法語墨蹟は日本に齎されたのであろう。しかしその原物が現今伝存しているのかどうか、私の見た二種のものうちのどれかがそれに当るのか、又はいずれも写であるのか、今は即決出来ないが、どうも原物ではなさそうな気がする。『万法語』所収のものは、その原物から写しとられたものであろう。原物の存佚不明な今日では貴重な記録である。

子建浄業は師の示寂より前に、入明によって、師と離れたため、その語録詩文集の編纂などには関与していない。

最後に子建浄業の作品のことであるが、建仁寺関係の宗派図とか塔頭記のようなものの子建浄業の条を見ると、大概左の詩句が注記してある。『東山塔頭籍并宗派』の妙喜庵の条に

子建浄業藏主 護花鈴詩云、漁陽烏鵲猶狼籍、蹴落沈香亭畔花、

同書の宗派の部にも、全く同様の注記がある。これは余程の名句として、当時の叢林に喧伝されたものであろう。「漁陽の烏鵲」とは安祿山のこと、「沈香亭畔の花」は楊貴妃のことであるという。そしてこの二句は絶句の第三・四句であって、その全章は、横川景三撰の『百人一首』に収められている。即ち

護花鈴

子建

掖外郎当風力斜、寧王心護玉皇家、漁陽烏鵲猶狼籍、蹴落沈香亭畔花、

と見える。横川からも注目されていたかくれた作家であることが知られよう。また建仁寺西足院所蔵の『東海瑠華集』と題する一冊本は、惟肖得巖の七言五言の絶句のみを集めたものであるが、その巻末に惟肖自身の覚書らしきものが附載されている。その一は江西竜派が自作百首を惟肖に呈して添削を求めたものが収めてあり、ついで中国の詩人杜荀鶴・司空図・韋応物・李商隱・王勃・陸龜蒙・盧同等の五言絶句を書きしるした部があり、その後には中国の南北朝時代の五山作家の七言絶句が集められている。義堂周信・絶海中津・無求周伸・観中中諦・中巖圓月・雲溪支山・空谷明応・物先周格・大本良中・春屋妙葩・謙岩原冲・雪村友梅・黙庵周論・心華元棟・少林周繁などの有名人に混じて子建の作品が三首収められている。その一首は

瓶梅

業子建

氷肌只浴青鬢水、絶色驚人不在多、燈窓移取横斜影、閑却黄昏月一坡、
で、もう二首はつづけて

雪中招友

業子建

建仁寺妙喜庵看寮子建浄業小伝（玉村）

氷雪吟牙骨亦清、熙々弄色引清光、別來訝我愁中鬢、撩亂春風千尺長、

感懷

同

揺落尋常情易悲、更驚多病一身衰、青山日暮碧雲合、預被古人偷我詒⁽⁶⁾

の二首である。これら四首の詩を見て感ずるのは、既に師中巖のような率直強烈な主張はなく、線が細く、感傷的で、応永末年の心田清播・江西竜派の作風を予告しているように思われる。

以上、中巖鍾愛の弟子で、石室・義堂からも瞩目され、殊に義堂からは、直接訓育をうけ、天稟の雅思をもちながら、異境の地で、何れの日かわからないままに、この世を去った一詩僧の小伝の略考を終える。福嶋先生の頌寿の論文集に、事もあろうに、薄命の詩人のことを書くのは、如何にも不適當とは思ったが、五山文学を講ぜられる先生のためには、この隠れたる一詩人の発掘は、それらの不吉さを超える意義あるものと自負して御寛恕を請う次第である。その上、今回新たに紹介する季潭宗泐の法語は、先生と同山内の靈雲院所藏のものであり、嘗て同院についてこの法語を含む『万法語』等の諸本を閲覧するについても、先生の御幹旋に負うところが多大であったその報恩のためにも、この小稿を先生に見ていただく意義は、更につけ加わるものと信ずる。最後に『万法語』の閲覧書写を許可して下さった東福寺靈雲院主岡根守堅師に篤く御礼を申し上げる。

——昭和四十五年正月三日稿——

- (1) 子建は少くとも二回、建仁寺妙喜庵と建長寺梅洲庵の間を往復しているらしいから、この三首の詩が、そのいずれの回の送別の詩であったかは遽かに判断出来ないが、前掲の律詩が、子建のみに宛てたのに対し、この方は中巖圓月にも兼簡して

るから、第一回の帰洛の際に同時に贈ったと見てもよさそうに思える。

(2) この詩が応安二年の作であることは、『自曆譜』内、その年の条に、この詩がそのまま収められているのよって知り得る。

(3) これらのことは木宮泰彦氏の『日華交渉史』森克己氏の『日宋貿易の研究』『明史』『勝定国師年譜』等に拠る。

(4) 『全室和尚語録』は明版の三巻一冊本が国会図書館に製蔵されているが、そのうちには、この小参法語は見えないから、東福寺靈雲院の『万法語』所収の文は貴重である。

(5) 拙校『五山文学新集』第二卷一〇二九・一〇三三頁参照

追記——この稿を了ってから、丹波法常寺を訪れ、同寺所蔵同寺三世禅巖文心筆写の『東海一漚集』写本の披閱を許されたが、その第一卷「字説」の部に他本にない文が多くあり、その一に「去病説」があり、祖訓という者に与えている。「祖訓多病、々從何起、因有多業、受此苦果、」云々とあり、「是汝祖訓、名生業識、宜改訓名、可称浄業、々既浄時、病自除去、以去病為字、不亦快乎、漢有霍去病、名将也、去病為人、名亦久矣、中正老僧、憐汝頗聰明而多病、々若去之、或可為我仏法中之利器也、故作是説為示、」と言い、この祖訓とは子建浄業のはじめの法名でのち浄業と改め、去病と号せしめたことがわかり、又生来病弱であったことを知る。更にそれにつゞけて「子建説」があり、「浄業病已去矣、更須抖擞精神、建立法幢、扶起宗教、在子一人耳、本字曰去病、今乃改之曰子建、」云々と見え、浄業の病が癒えたから、字を「子建」と更め、曹植（子建）の文名にあやかろうというのである。そう思つて見ると、『東海一漚集』に、「贈訓侍者」の五言八句があるが、これは子建に与えたものであることになる。延文五年の中巖の詩には「浄業」とあるから、この字説や贈詩はそれ以前のものであることとなる。した

がって、子建の入室は延文五年よりも前である。また更に想像を逞しくすれば、子建は中巖の俗姪ではないかと思ふ。中巖の信頼と鍾愛菴ならぬのは、資質のすぐれた上に、血のつながりがあるためではなからうか。石室・義堂等が子建に与えた詩の讃辭にも、どうも中巖の一族としての遠慮と儀礼の意が含まれているように解せられる。『自曆譜』の元応二年の条に、中巖二十一歳、阿姉阿甥の難を救わんがために、出羽に赴いたとある。このとき難を救われた阿甥がのち中巖が引取って門弟とした子建に当るのではないかと考え得るが、さきの「子建説」に「浄業亦年未登而立」とあり、この説を作ったのが、作品の年代的配列によって考えると、延文二年から四年の間のことであり、年齢的に合わないから、その阿甥の弟であるかも知れない。そう考えると、同じく『自曆譜』貞治五年の条に「浄業父死」とあるのは、浄業の父が、中巖の姉の夫であるからこそ、『自曆譜』にその死を録したので、単なる鍾愛の弟子の父なら、記さないであろう。血族の人だからこそ、妙喜庵や梅洲庵の留守番(看寮)を安心して委ねたのであるとも解せられる。若し子建が延文三、四年に二十八、九歳なら、中巖と三十歳の差があることとなる。

右の二箇条は、子建の行履の上で大切なことであり、この稿擱筆後に判明したので、追記して補正する次第である。なお、法常寺本閲覧については、同寺住持宮裡頭秀師、禅文化研究所の木村静雄師、関西学院大学の永島福太郎氏、建仁寺両足院の伊藤東慎師のお世話になった。併びに深く感謝の意を表す。――昭和四十五年二月二十七日補――